

ウィリアム（ギョーム）の名に冠せられた王家の血

ユースタス・マリNZは『世界権力構造の秘密 上』にて「今日、ヨーロッパを支配する各王室および領国をもたない王室もすべて、オレンジ公ウィリアム3世の直系子孫である。すなわち、オランダのユリアナ女王、デンマーク女王マルガレータ、ノルウェーのオラフ5世、スウェーデンのグスタフ、ギリシアのコンスタンティン、ルクセンブルク大公ジャン（息子がダグラス・ディロンの娘と結婚）などである。」としています。この情報の確認は取れていませんので何とも言い切れませんが、ユリアナ女王やマルガレータ女王、オラフ5世等々は、4度結婚してその血流が多くの欧州王族の中に流れ込んでいるオラニエ公ウィレム1世の血脈にあることは確かです。ウィリアム、ヴィレム、ウィルヘルム、ギョームの名に隠されてある「マグダラのマリアの血流」が欧州を支配している多くの王族の中に流れ込んでいるのです。

「マグダラのマリアの血流」を受け継いだウィリアム、ヴィレム、ウィルヘルム、ギョームこの名前の始祖が「ギョーム・ド・ジェローヌ」のようです。

[ウィキペディア](#)記事では冒頭次のようにあります。

「ギョーム・ド・ジェローヌ（755年頃 - 812年/814年5月28日）またはギョーム・ドラングジュは、第2代トゥールーズ公（在位：790年 - 811年）。ジェローヌ大修道院を創設し、1066年に教皇アレクサンデル2世により聖人とされた。10世紀または11世紀に、ラテン語の聖人伝『Vita sancti Willelmi』が言い伝えをもとにつくられ、12世紀までにはギョームに関する伝説が出来上がった。ギョームは武勲詩において英雄として描かれ、武勲詩の初期の作品で1140年頃成立の『Chanson de Guillaume』に登場する。ギョームは武勲詩においてはその強さから「フィエラブラ」（武を誇る者）あるいは巨人との戦いで受けた傷から「marquis au court nez」（低い鼻の侯爵）と呼ばれている。」

詳細については映像配信「[宗教学講座 第223回 秘密伝承（レンヌ・ル・シャトー）](#)」をご視聴ください。